

ご下付物④

～お松灰・かやの実 いちよらの葉～



ご下付料

お松灰 …… 1,000円以上
 かやの実 …… 1,000円以上
 いちよらの葉 …… 1,000円以上

お松灰・いちよらの葉は、綾部・長生殿、亀岡・万祥殿、東京本部で下付されています。
 かやの実は、亀岡・万祥殿でのみ下付されています。



信仰的な気持ちで

この世のすべてのものは、神さまのお力によって存在しています。その中でも特に、大本の聖地には、神さまの“氣”が満ちています。大地をはじめ、元の小石や草木にも神気が宿り、聖地に足を踏み入れるだけで気持ちが静まり、ご神徳を頂く方がいます。

今回紹介したお松灰・かやの実・いちよらの葉をはじめとするご下付物は、医薬品ではありません。

神さまの“氣”を頂くつもりで、神さまへの感謝と畏敬の気持ちをもって、信仰的にご下付物を頂きたいものです。



大本では、“お松灰”“かやの実”“いちよらの葉”が下付されています。これらは聖地や、大本にゆかりのある場所で採られたものです。

今回はこれらのご下付物について、頂き方と一緒に紹介します。



みろく博士

大本本部

綾部・梅松苑 綾部祭祀センター
 〒623-0036
 京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター
 〒621-8686
 京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部 東京宣教センター
 〒110-0008
 東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>



灰は何に使う？

草木などを燃やした後にできる「灰」は、古来より、生活の中でさまざまな形で用いられてきました。現在でも、山菜などのあく抜きには水に灰を混ぜた灰汁が使われています。また、「百草霜」という漢方薬の材料にもなるそうです。灰は肥料、洗剤などにもなるので、昔の人は、木々やゴミを燃やした後の灰もきちんと回収し、大切に扱ったそうです。（※化学物質などで汚染されていない清潔な草木灰に限りません）

松灰の頂き方

大本で下付されている松灰は、綾部・梅松苑の本宮山（禁足地）の松葉を灰にしたもので、大本二大教祖のひとり、出口王仁三郎聖師の指示により、昭和20年ごろから下付されるようになりました。耳かきで1すくいほどの少量を、水またはぬるま湯と一緒に頂きます。コップに入れた水にティースプーン1杯の松灰を入れてかき混ぜ、松灰が底に沈んだあとの上澄みの水を頂く方法もあります。



【お松灰】
本宮山の松葉のみで作られる
清らかな灰は貴重なもの



【かやの実】
生の実はあくが強く苦味があるため、
食用とするには灰汁に5日間ほどつ
けるあく抜きが必要

古代食・「かやの実」

かやの実は、縄文時代よりクリ、クルミ、トチ、シイノミなどとともに、人々の食糧になっていました。平安時代の医療書「典薬寮」には、回虫や十二指腸虫を駆除する薬として、かやの実を用いたと書かれています。また、夜尿症の薬としても、古くから民衆に親しまれてきました。かやの実がなるかやの木で作られた碁盤や将棋盤は、最高級品として珍重されています。

かやの実の頂き方

大本で下付されているかやの実、は、亀岡市曾我部町穴太の瑞泉苑（出口王仁三郎聖師生家跡）の苑内にあるかやの木から採ったものです。生の実はあくが強いのですが、下付される実はいくらかあく抜きがされています。外の皮を割ってそのまま頂いたり、軽く煎って頂いてください。聖師は、「喘息は榧の実を煎って毎日食べるとよい」（『水鏡』）と記しています。



【大公孫樹】
雌株である大公孫樹は、
毎年多くのギンナンを实らせる

亀岡の大公孫樹

大本で下付されているいちちょうの葉は、亀岡・天恩郷の大公孫樹から採取されたものです。大公孫樹は月宮宝座（禁足地）の横にあり、樹齢は約400年。明智光秀公の手植えと伝えられています。現在の木は2代目だという説もあります。地元亀岡市民にも親しまれた大公孫樹は、昭和10年の大本弾圧による聖地破壊の際には、市民の声によって伐採を免れました。

いちちょうの葉の頂き方

聖師は、「母乳の少ない人は、妊娠中に、公孫樹の葉を七枚煎じて飲むと出るようになる。産後に飲んで、かなりききめがある。昔の人は、乳の守りとして、乳が出ない人は、よく公孫樹に願をかけた」（『愛善健康法』天声社刊）と示しています。いちちょうの葉を頂く時は、600ccの水に対して葉を7・8枚入れ、10〜15分ほど煎じます。粉末にして水またはぬるま湯で頂く方法もあります。

豆知識

先人の知恵「煎じる」

「〇〇を煎じて飲む」とよく耳にします。「煎じる」とは、漢方薬や薬草などを水に入れて煮詰め、薬草に含まれる成分を煮出すことをいいます。昔の人はさまざまな野草を使い分け、健康維持や病気の時に「煎じ薬」として飲んでいました。煎じる際に使う鍋やヤカンは、耐熱性ガラスやほうろこ鍋、土瓶などが適しています。鉄や銅で作られたものは、煎じている途中で化学反応が起こり、成分が変化する可能性があるため、避けた方が良いでしょう。



【いちちょうの葉】
夏の青々とした葉を採取し、
土用干ししたものが下付される

